

「現代の遠野物語」と称賛も

被災地の幽霊を社会学

東日本大震災の被災地に広まる幽霊の目撃談。オカルトではなく、フィールドワークの対象として地元の大学生が取り上げ、注目を集めている。

東日本大震災はおびただしい数の「死」と「別れ」をもたらした。死者1万5894人、行方不明者2562人（2月10日現在）の一人ひとりに、別れの物語がある。

そうした膨大だが記録に残りにくい個人の喪失感を、社会的観点からすくい取った論文集が反響を呼んでいる。1月末に出版された「呼び覚まされる霊性の震災学」（新曜社）だ。

執筆したのは、東北学院大学の金菱清教授（40）と7人のゼミ生。重視したのは「当事者」の視点だ。そのため理屈では説明できないテーマもある。

タクシー運転手リアルな体験

工藤優花さん（22）が書いた、宮城県石巻市で働くタクシー運転手の幽霊体験もそうだ。インタビューが国内外のメディアで取り上げられたことからネットで話題になり、フランスやブラジルのテレビ局からも取材が舞い込んだ。「現代の遠野物語」と称賛する人がいれば、「論文で取り上げるテーマではない」



津波で大きな被害を受けた宮城県名取市の閉上地区に立つ（左から）金菱清・東北学院大教授と、ゼミ生の菅原優さん、工藤優花さん。24日には大学で関連シンポジウムが開かれる

と厳しく指摘する学者もいる。しかし、被災地では震災直後から幽霊の目撃談が数多く流布している。工藤さんが研究を始めたのは、金菱教授から与えられたテーマ「被災地における死生観」を探るうちに、「なぜ幽

霊話が語られるのか」という素朴な疑問を抱いたからだ。「私自身、本当ののかなという思いがあります。でも、疑われて自分が不快になるような話を人はするでしょうか。胸に秘めていた体験を打ち明けてくれた

運転手さんもいました」

幽霊の多くは子どもや若い男女。遭遇した時間は夜だけでなく昼も。そして体験談には思い込みとは言い切れないリアリティーがある。メーターを「実車」

に切り替えたり、運転手が無賃乗車の代金を弁償したりした記録があるからだ。幽霊が「恋人に渡してほしい」と置いていったという小箱をタッシュボードにしまい続けている人もいた。「どの運転手さんも大切な体験として語ってくれました。「また乗せるよ」と話した人も。幽霊を恐怖ではなく、愛おしい存在にとらえているんです」

論文は書き終えたが、工藤さん自身も「死」に対して整理できない思いを抱えている。

震災慰霊碑の役割探る学生も

「霊性の震災学」には、火葬が間に合わず土葬された遺体を掘り起こし、葬儀を担当した業者を取り上げたもの、離れて暮らす親が亡くなり、被災者としての思いを他者と共有できずに悩む女性の体験を追ったものなど、

人々がそれぞれの立場でどう「震災の死と別れ」に向き合ったかが書かれている。

宮城県内だけで46柱もある震災慰霊碑をテーマにした菅原優さん（22）は、建てた人の思いによって慰霊碑の役割が違うことに気づいた。

「名取市閉上にある慰霊碑は子どもを亡くした親御さんたちが「生きた証しを残したい」という思いで建てていました。簡単に死を受け入れられないとき、彼岸でも此岸でもない、その間にある魂を感じることが救いになるのかもしれない」

菅原さんは慰霊碑には鎮魂だけでなく、「記憶」としての役割もあると話す。

指導した金菱教授は19歳のとき、阪神・淡路大震災を大阪で体験している。当時、メディアでは大量の情報が流れたが、人々が何を、何を感じていたのか、パーソナルな体験の記録があまりないことに衝撃を受けた。そして東日本大震災では個人の記録を残そうと、震災直後から被災者の声を丹念に拾っている。

「東日本大震災のように行方不明が多い災害では、死の受け入れ方も復興に大きく関わる。みずみずしい感性を持つ学生だからこそ、素直に物怖じせず取り組めることもある。復興の答えは現場の声にあるのです」

ライター 角田奈穂子



ネットで話題になったとたん、アマゾンでは「災害」カテゴリーの売り上げ1位になった